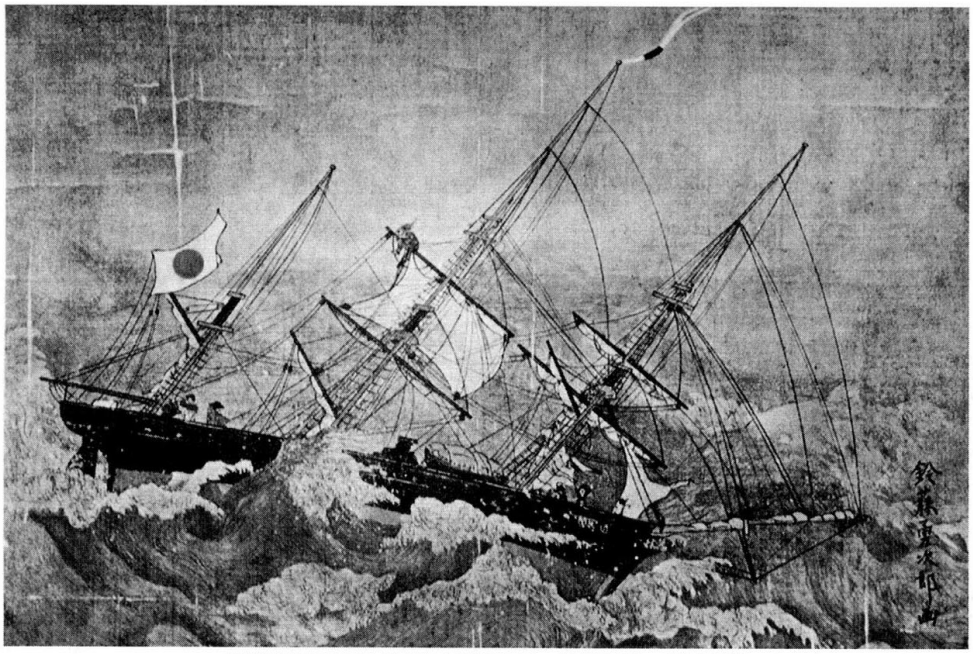
横浜開港資料館館報　YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS　第69号

開港のひろば

Number 69

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100
ホームページ http://www.kaikou.city.yokohama.jp/

発行日／平成12年8月2日（水）
印　刷／中川印刷株式会社



鈴藤勇次郎原画「咸臨丸難航図」　木村家蔵・当館保管

企画展「咸臨丸 太平洋を渡る —遣米使節140周年—」

歓迎宴の図　「咸臨丸洋行日録」から
早稲田大学図書館蔵

今年は、万延元年（一八六〇）の遣米使節の渡航から一四〇周年にあたります。長い鎖国の後、初めて海を渡った使節団でした。

また、そのとき同時に別艦としてアメリカに派遣され、日本人として初めて太平洋横断をなしとげた咸臨丸の航海の一四〇周年でもあります。

そもそも遣米使節が派遣されることになったのは、幕府がハリスと結んだ日米修好通商条約によるものです。条約の批准書の交換をワシントンで行いたいという日本側の提案に、ハリスは驚きながらも、これを歓迎し、その旨が条約文に明記されました。条約の交渉にあたった岩瀬忠震ら、いわゆる開明派官僚たちの積極的な姿勢、海外見聞への夢がくみとれます。

使節の渡米には、アメリカの軍艦が迎船として来航することになりましたが、最初に使節に任命された水野忠徳・永井尚志（初代外国奉行）らは、それとは別に、日本人操縦の軍艦を派遣することを建議したのです。長崎海軍伝習所や軍艦操練所での訓練を生かし、遠洋航海の実地訓練を行いたい、というのが真の意図でした。こうして最終的には咸臨丸が選ばれて、太平洋を渡ることになりました。

咸臨丸といえば、まず思い出されるのが、上の「咸臨丸難航図」でしょう。冬の北太平洋の荒波に翻弄される様子が見事に描かれています。この厳しい航海を乗り切れたのは、実際には、同乗したアメリカ海軍士官・水夫の航海技術によるものでした。

艱難辛苦の三七日間の航海ののち、ついにサンフランシスコまで到達した咸臨丸一行は大歓迎をうけ、船の修理のため二か月近く現地に滞在することになりました。

遣米使節の正使一行がほどなくワシントンに到着するとの報を受けて、咸臨丸一行はサンフランシスコから帰国の途につきました。帰路は天候にも恵まれて、ほぼ日本人の手だけで航海するのに成功しました。

今回の展示は、この咸臨丸の航海と、その担い手たち—木村喜毅、勝海舟、ジョン万次郎、福沢諭吉らの足跡をたどるものです。（伊藤久子）

企展画

「咸臨丸 太平洋を渡る」展から

記念品が語るアメリカ体験

咸臨丸はサンフランシスコに到着した後、サンフランシスコ湾の北端にあるメーア島海軍造船所に回航され、そこで修理された。そのため乗組員は五〇余日にわたってアメリカ生活を送ることになった。太平洋横断という初めての遠洋航海ばかりでなく、サンフランシスコの街や造船所でさまざまな体験をすることができたのである。

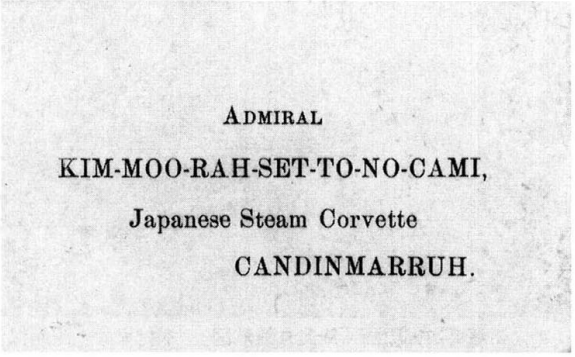
木村摂津守はかつて長崎海軍伝習所の監督だったし、また勝海舟ら士官たちもほとんど同伝習所の出身だったから、西洋人との接触が初めてというわけではなかった。また、もと漂流民でアメリカ帰りの中浜万次郎という心強い通訳もいた。それでも初めての海外体験には驚くことが多かっただろう。

蘭学を学び、英学を志していた福沢諭吉も「百聞は一見にしかず」という体験をした。後に当時を思い出して、「所見所聞一として新ならざるはなし。多年来西洋の書を読み理を講じて多少に得たる所の其知見も、今や始めて実物に接して大いに平生の思想に齟齬するものあり、又正しく符合するものありて、之を要するに、今度の航海は諭吉が机上の学問を実にしたるものにして・・・」と述べている（木村喜毅『三十年史』の序文）。

馬車を見て驚き、グラスの中の氷に驚いていた一行も、アメリカ生活に次第に慣れていったに違いない。かれらが持ち帰った記念品は、その体験の片鱗を物語っているといえる。そのいくつかを紹介しよう。

木村摂津守の名刺

木村摂津守は提督、勝海舟は艦長と説明されることが多い。しかしこの肩書きは正式なものではなく、どちらかいえばアメリカ側の理解によるものである。


ADMIRAL
KIM-MOO-RAH-SET-TO-NO-CAMI,
Japanese Steam Corvette
CANDINMARRUH.

木村摂津守の名刺　木村家蔵・当館保管

木村は軍艦奉行、勝は教授方頭取というのが当時の文書にでてくる表記である。軍艦の乗組員といっても、近代海軍のような組織ができていたわけではない。軍艦奉行以下、軍艦操練所の組織がそのまま咸臨丸に移ったようなものであった。

咸臨丸に同乗したブルック大尉も理解に苦しんだらしい。中浜万次郎に尋ねて、提督（アドミラル）、艦長（キャプテン）にあたると理解した。それがそのままアメリカでの呼び方になったものと思われる。

木村摂津守の名刺は木村家に伝わるもので、アメリカで作ったといわれる。日本人の英文の名刺としては、おそらく最初のものではないだろうか。

肩書きはアドミラルとあり、その下にキムラセッツノカミの名が、一音づつ区切って印刷されている。アメリカ人には発音しにくい長い名前だったことがうかがわれる。ここには日本人の姓名を、欧米式に名・姓の順に書くという発想がまだ見られないのが興味深い。

勝海舟の肖像写真

メーア島海軍造船所滞在中、修理作業や当直の合間を縫って、一行は見学や見物に出かけている。

なかでも人気が高かったのが、写真館だと思われる。勝海舟、福沢諭吉、長尾幸作（医師、木村の従者）、向井仁介（塩飽水夫）、それに浜口興右衛門ら六名のグループ写真などが知られている。

勝海舟の肖像写真は、他の写真と同じような皮張りのケース入りのガラス板写真だが、縦二三センチという大判の立派なものである。

勝海舟の肖像写真は、ほかにも羽織姿を正面から撮影したものがあって、勝は印画紙に焼いたものを、松阪の竹川竹斎に贈っている（射和文庫所蔵）。『ニューヨーク絵入新聞』一八六〇年六月二日号に大きく掲載されている勝の肖像の挿絵は、こちらの写真をもとにしていると思われる。

福沢諭吉が写真館の少女とともに撮った写真は有名で、はじめ隠しておいて誰にも見せず、ホノルルを出航してから皆にみせて自慢したというエピソードが残っている。

サンフランシスコで撮った勝海舟の肖像写真　勝芳邦氏蔵

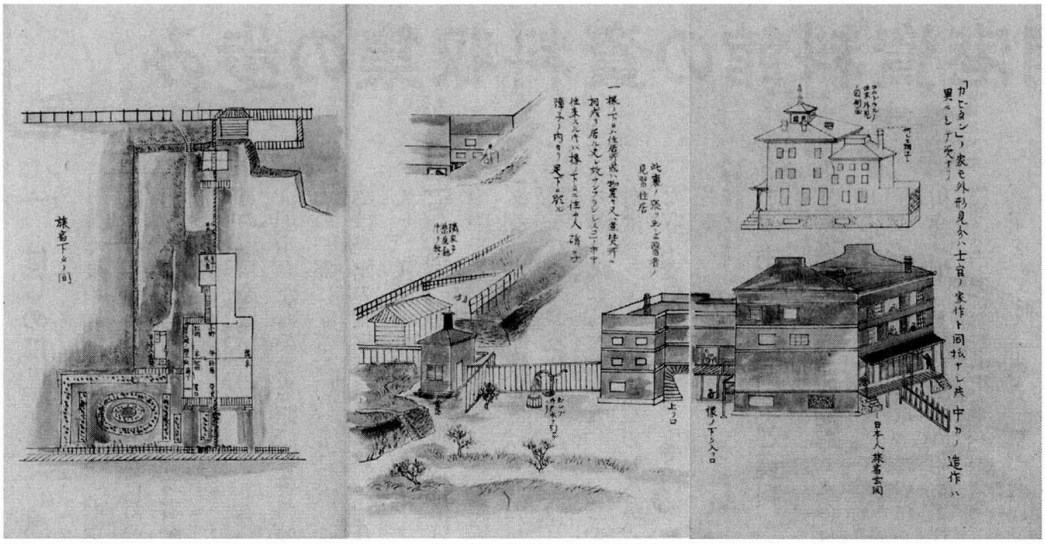
メーア島海軍造船所の宿舎のスケッチ

早稲田大学図書館の洋学文庫（勝俣銓吉郎旧蔵）に「咸臨丸洋行日録」という題の写本がある。欠丁が多いが、彩色の挿絵がふんだんにあって、魅力的でもあり、貴重な資料ともなっている。

この写本には著者が記されていないが、東京大学史料編纂所蔵の鈴藤勇次郎「航亜日記」（こちらは挿絵を省略した写本）と照らし合わせてみると、ほぼ同一人物の日記と推定される。あの「咸臨丸難航図」を描いた鈴藤勇次郎のスケッチとすると納得がいく。このスケッチは記念品

とはいえないかもしれないが、アメリカ体験を生き生きと伝えていて、一種のアメリカ土産ともいえる。

ここに示したのはメーア島海軍造船所の宿舎の図。咸臨丸の士官や従者に提供された海軍の官舎で、それぞれ一階から三階までの部屋に宿泊した。一番左は一階の平面図で、左下にみえる花壇の上の別棟に、自炊用の台所と日本式の風呂が設けられた。福沢諭吉がテンプラを揚げようとして火事騒ぎを起こしたのは、この台所のはずである。



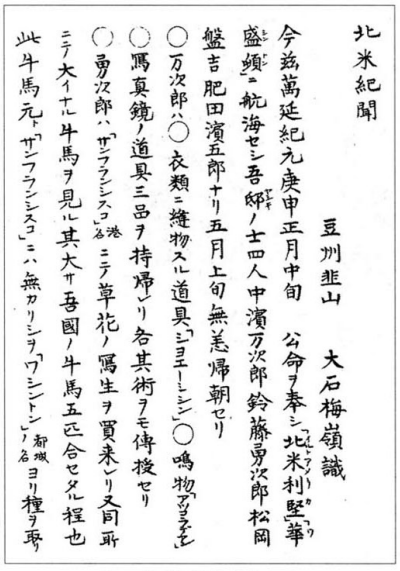
メーア島海軍造船所の宿舎　「咸臨丸洋行日録」から　早稲田大学図書館蔵

中浜万次郎の将来品

前述の鈴藤勇次郎「航亜日記」の写本の巻末には、大石梅嶺が記した「北米紀聞」という付記があって、江川太郎左衛門の邸の四人、中浜万次郎・鈴藤勇次郎・松岡盤吉・肥田浜五郎の土産や土産話を記している。

万次郎が持ち帰ったものとして、縫物の道具「ショエーミシン」、鳴物「アッコラデアン」、写真鏡の道具の三品をあげている。ミシンとアコーデオンとカメラである。

アメリカ生活が長く、サンフランシスコも初めてではなかった万次郎は、他の人びとのような文化ショックはなかっただろう。自分で持ち帰ることができ、役に立つ機器をしっかりと選んでいる。そしてそれぞれその使い方も伝授したのである。



北米紀聞

豆州韭山　大石梅嶺識

今茲萬延紀元庚申正月中旬　公命ヲ奉シ「北米利堅」華盛頓ニ航海セシ吾邸ノ士四人中濱万次郎鈴藤勇次郎松岡盤吉肥田濱五郎十月五日上旬無恙帰朝セリ

○万次郎ハ○衣類ニ縫物スル道具「ショエーミシン」○鳴物「アコーデオン」

○写真鏡ノ道具三品ヲ持帰リ各其術ヲモ伝授セリ

○勇次郎ハ「サンフランシスコ」港名ニテ草花ノ写生ヲ買来リ又同所ニテ大イナル牛馬ヲ見ル其大サ吾国ノ牛馬五匹合セタル程也

此牛馬元ト「サンフランシスコ」ニハ無カリシヲ「ワシントン」都城名ヨリ檀ヲ乗

大石梅嶺「北米紀聞」
東京大学史料編纂所蔵「亜行日記」付記

マクドゥーガルが勝海舟へ贈った本

マクドゥーガルはアメリカ海軍士官で、メーア島海軍造船所で咸臨丸修復の指揮をとった人物。修復のために尽力したばかりでなく、木村摂津守や勝海舟を自宅に招いてもてなすなど、咸臨丸一行と暖かい交友関係を結んだ。

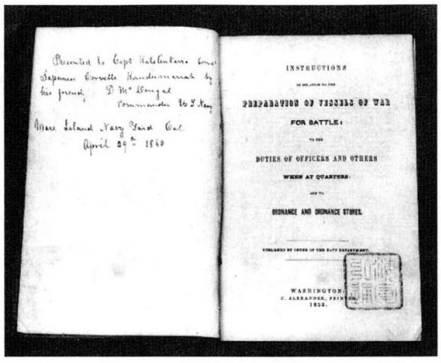
勝はこのマクドゥーガルから本を贈呈されている。米海軍省が海戦時の戦艦の準備や配置を指示した指令書である。本のタイトルページの反対側に贈呈の辞があり、「咸臨丸のキャプテン、カツリンタローへ、その友マクドゥーガルから贈る」とある。咸臨丸の修復が完了した四月二九日の日付となっている。

それから二年後の文久二年（一八六二）、マクドゥーガルは米艦ワイオミング号の司令官として来航し、木村や勝と旧交を温めた。肖像写真はその折に木村に贈ったもの。木村はマクドゥーガルを自宅に招きたいと切望したが、許可がおりなかったと残念がっている（『木村芥舟翁履歴略記』）。

その翌年、長州藩のアメリカ商船砲撃事件が起こり、その報復としてワイオミング号で長州藩船を撃沈したのが、このマクドゥーガルである。

木村は、アメリカでの見聞を通して、一衣帯水の隣国アメリカと友好関係を保つことが、日本にとって重要だと痛感していた。その木村にとって、攘夷の風潮はまことに遺憾であったに違いない。

（伊藤久子）



マクドゥーガルから勝海舟への贈呈本　当館蔵

マクドゥーガル肖像写真
木村家蔵・当館保管

横浜開港資料館の資料収集の歩み

一、はじめに

本年度の第一回企画展示「歴史資料への招待―受け継がれた横浜の記憶―」では、当館が市民から寄贈・寄託を受けた資料を中心に約一九〇点の資料を展示した。

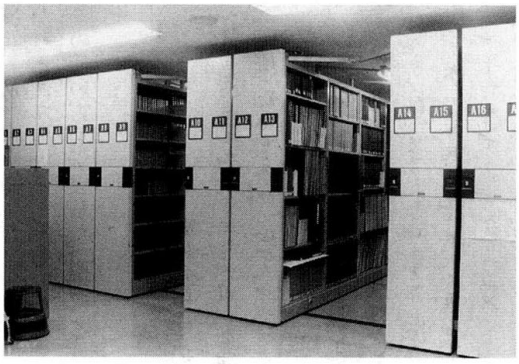
展示したものは当館収蔵資料のほんの一部にすぎない。そこで、ここでは当館の収集資料の概略を紹介したい。英語名では「アーカイブス」（文書館）を名乗る当館の収集資料の中心は、あくまでも文書・記録である。当館は開館して今年で一九年目をむかえ、収蔵資料は約二〇万点を数えるようになった。それらの資料はバラエティに富んでいるが、主な収集資料としては、以下のものがある。

二、市史編纂事業と資料

横浜開港資料館が開館したのは、昭和五六年（一九八一）である。当館設立のきっかけとなったのは、昭和二九年（一九五四）に開始された『横浜市史』編纂事業（第一期）が終了をむかえ、市史編纂の過程で収集された歴史資料をどのように保存・活用していくのかが問題となったことである。

横浜市は、大正九年（一九二〇）に市史編纂係を設けて資料の収集をはじめた。しかし、大正一二年（一九二三）関東大震災に遭い、収集した資料の全ては灰燼に帰した。その後、再び資料の収集につとめ、昭和六年（一九三一）から八年にかけて『横浜市史稿』全一一冊を刊行した。昭和二九年度からは、横浜開港百周年事業として再度歴史編纂が開始され、昭和五六年までに『横浜市史』五巻全九冊、補巻一冊、資料編二一冊、索引一冊を刊行した。

結果的には、関東大震災以後昭和五六年までの間に蓄積された約四万点の資料が、開港資料館に引き継がれ、収蔵資料の基盤となった。



当館収蔵庫

三、開館時の方針

市史編纂の過程で収集された資料に加え、横浜開港資料館設立準備担当が新たに資料の収集を始めたのは、昭和五五年（一九八〇）のことである。その前年三月に横浜開港資料館設立研究委員会議が作成した「横浜開港資料館設立の基本的な方向」に基づき、資料の収集に着手することになり、江戸時代から大正期までの横浜に関する資料を収集・保存・公開することになった。

また、横浜が関東大震災や第二次世界大戦での空襲の被害に遭っているうえ、昭和三〇年代以降の急激な都市化に伴い市域の多くの資料を失っていることから、資料の収集にあたっては対象地域を市内に限定せず、海外も含めて各地から資料を集めることになった。さらに原資料だけでなく、マイクロフィルムによる収集も行うことになった。

こうして、現在までに約二〇万点の資料を所蔵するに至っている。

四、主な資料

それでは、具体的にどのような資料があるかあげてみよう。

①行政資料（約三、〇〇〇点）

行政資料とは、横浜市・神奈川県・市内各区・県内各郡・横浜市域旧町村が複数部印刷・発行した資料である。例えば、統計書・県公報・市公報・調査報告書などがこれにあたり、震災・戦災などで役場の文書を失った現在、行政資料は貴重である。

②国内政府資料（約一六、〇〇〇点）

横浜は、開港以来わが国第一の貿易港をもつ町として発展してきたため、わが国の政治・経済に占める位置が高く、国の諸機関と密接な関係をもってきた。そのため、国の諸機関が所蔵する公文書のなかには、横浜関係の資料が多く含まれ、これらのなかから『正・続通信全覧』、『太政類典』、『外務省記録』、『官員録・職員録』、『大日本外国貿易年表』などを収集している。

③市内外の旧家文書（約六二、〇〇〇点）

江戸時代から大正期にかけて、名主や戸長をつとめ、あるいは村長、議員などの公職をつとめた人物を出した旧家に残された資料で、村や町のしくみや人々の生活など地域の具体的な姿を知ることができる。また、近隣の市町村や貿易上関係の深かった県外の旧家文書でも、横浜の歴史を解明するうえで重要なものは収集している。

④海外資料（約一二、五〇〇点）

横浜には外国人居留地があり、明治三二年（一八九九）の居留地撤廃後も多くの外国人が居住していた。横浜の開港、貿易、居留地をめぐる諸問題は、外国との関係をぬきにしては考えられない。さらに、震災・戦災による国内資料の欠を補うため

横浜の生糸貿易商吉村屋が、群馬県の生糸荷主中島九左衛門に送った輸出生糸に関する決算報告書。群馬県の吉田家が原文書を所蔵している。

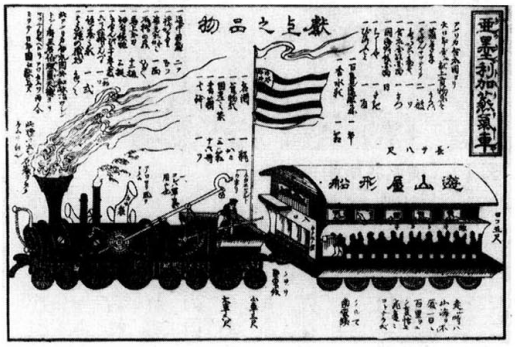
に、各国政府関係文書や海外に残された日本関係の資料が必要となる。そのため、英・米・仏・中国の外交文書、英・仏の陸海軍省文書、神戸英国領事館文書、宣教師報告書、来日外国人の回顧録・日記・書簡・旅行記などを収集している。

⑤新聞・雑誌（約三、三〇〇紙・誌）

横浜は、わが国で最初の日本語日刊新聞である『横浜毎日新聞』が発行された場所であり、外国人居留地でも早い時期からいくつかの外国語新聞が発行されている。新聞は、発行当時の政治・経済のみならず、当時の社会・風俗・世相などを具体的に知ることのできる資料である。加えて、「神奈川県布達」など、新聞に掲載された記事により、法令の原資料の欠を補うこともできる。

日本語新聞では、横浜で発行された『横浜毎日新聞』、『横浜貿易新聞』、『横浜貿易日報』などを収集している。外国語新聞では、『ジャパン・ウィークリー・メイル』、『ジャパン・ガゼット』、『ジャパン・ヘラルド』などがある。

磯子区の旧家堤家より寄託を受けた、『日新真事誌』創刊号（明治5年3月17日）と第2号（同年3月19日）



横浜市史編集室（第1期）旧蔵の瓦版。ペリーが初めて日本に上陸した時に、幕府に献上した蒸気機関車の模型を描いたもの。

雑誌は、政治・経済・教育・文学などの各分野に及んでいる。日本語雑誌では『実業之横浜』など、外国語雑誌では『クリサンシマム』、『ファー・イースト』、『ジャパン・パンチ』などがある。

⑥横浜浮世絵・瓦版・地図・写真・絵葉書・商標・芝居番付・絵画・チラシ・建築設計図面など（約三〇、〇〇〇点）

近年視覚的な資料を駆使した研究が行われているが、当館では、早くからそれらの資料の収集もしてきた。視覚的な資料は、研究資料としてだけでなく、展示・出版に欠くことのできないものである。

⑦文献資料（約四五、〇〇〇点）

文書や行政資料を補うための資料で、主なものとしては、神奈川県・横浜市を含む各地方史誌、『日本史籍協会叢書』、『明治百年史叢書』、『法令全書』、『渋沢栄一伝記資料』などの横浜の歴史を明らかにする上で必要な史料集及び研究書、辞典、目録などの参考図書がある。

⑧個人コレクション（約二八、〇〇〇点）

アメリカ人、ポール・C・ブルーム氏が収集した日本関係洋書・横浜浮世絵・地図・欧州版日本古地図などを含む約六、四〇〇点のブルーム・コレクション。アメリカ人ジャーナリスト、ドナルド・B・ブラウン氏が収集した外国語新聞や雑誌を含む約一〇、〇〇〇点からなるドン・ブラウン文庫。横浜開港資料一、一〇〇点を集めた五味文庫。主に日本外交史関係の文書や図書約一〇、〇〇〇点からなる稲生典太郎文庫。日本関係絵葉書のペドラー・コレクション。明治・大正期の庶民生活資料を収集した岡コレクション。その他、海外交渉史の文献を集めた岩生成一文庫や相原良一文庫、長澤信雄メニュー・コレクションなどがある。

五、おわりに

開館以来一九年の歳月が経過し、現在までに海外資料に関しては、上海市との学術交流事業や職員のアメリカ・イギリス・フランスへの出張調査を実施し、英米仏の外務省文書のみならず、陸海軍省の文書から個人文書まで幅広く収集した。国内資料については、江戸時代から明治初期にかけての名主文書を主体として収集していた段階から、明治・大正期にかけての企業、商家・農家の経営資料にも収集の手が及ぶようになった。現在ではさらに、横浜と関係の深かった群馬・長野など、輸出品であった生糸の産地に残る資料を収集したのみならず、函館・新潟・長崎など他の開港場や諸藩に残る横浜関係資料にも調査・収集の対象を広げつつある。

今後の資料収集のありかたについては、充分に検討が必要であるが、これからも横浜の歴史に関する資料がすべて揃っているような資料館をめざしたい。

紙面の都合で、検索手段については詳しく述べなかったので、資料を利用される折不明な点は、閲覧室カウンター内の職員にたずねていただきたい。

（上田　由美）

ブルーム・コレクション所収の『和英語林集成』初版（ヘボン編訳 1867年）

山下町135番地考
―中華街の歴史を刻む場所―

二〇〇〇年六月、中華街の一角にある山下町公園が改修を終えてオープンした。今回の改修工事を進める過程で、公園敷地内から明治時代の瓦などが発掘された。山下町公園の所在地、山下町（旧横浜居留地）一三五番地は、中華街の歴史を語る上で、欠くことのできない大切な場所である。そこでこの土地に関わる歴史と、今回発掘された資料について紹介したい。

会芳楼の所在地

幕末・明治の初年に横浜で暮らす中国人は千人あまり。その中の有力者韋香圃（いかほ）は、一八七〇年（明治三）頃、居留地一三五番地、現在の山下町公園所在地に会芳楼を開いた。会芳楼は劇場と料亭を兼ねた娯楽場であった。その頃の居留地では劇場は珍しかったので、中国人だけでなく、西洋人や日本人も利用する施設となった。中国からの名優を招いての演劇や、西洋人のアマチュア劇、日本人の綱渡りなどの曲芸が披露された。

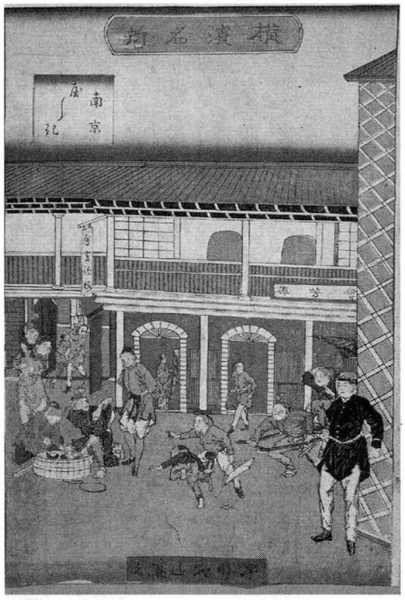


図1　「横浜名所南京やしき」
松山画、明治10年頃
（神奈川県立歴史博物館所蔵）

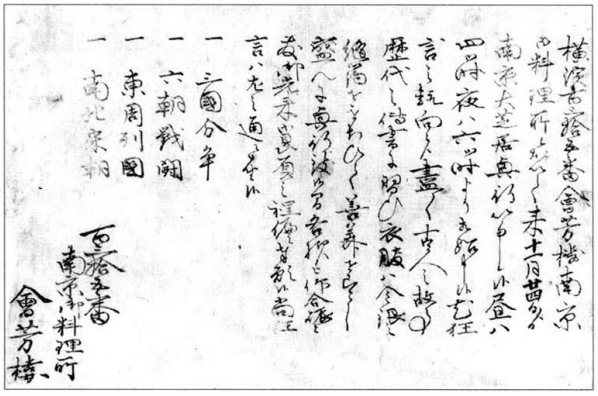


図2　会方楼引札（横浜開港資料館所蔵）

図2の引札は、中国芝居「三国分争、六朝戦闘」などが上演されると宣伝している。当時の浮世絵（図1）にも会芳楼の外観が描かれている。また一八七五年（明治八）三月五日号の『横浜毎日新聞』に掲載された会芳楼の広告によれば、館内には中国明朝以来の書画・骨董や盆栽が陳列され、庭園には「香草奇樹」が植えられ、訪れる人々の目を楽しませたという。人々が集う会芳楼は中華街の核の一つとして、街に活気をもたらした存在であった。会芳楼はその後、経営者の交替などが影響して明治一〇年頃には姿を消した。それから一二〇年あまりが過ぎた今年、山下町公園改修の一環として、公園内に中国風の東屋が設けられ、「会芳亭」と名づけられた。「会芳楼」の記憶がふたたび中華街に甦った。

中国の領事館の所在地

明治一六年（一八八三）八月、会芳楼の跡地に、清国領事館の新館が落成した。それまで居留地一四五番地にあった領事館が移転してきたのである。横浜の清国領事館の開設は、日清修好条規締結七年後の一八七八年二月三日のことである。初代領事は范錫朋（はんしゃくほう）、一三五番地に移転した際の領事は、二代目領事の陳允頤（ちんいんい）である。横浜の清国領事は、横浜に暮らす中国人だけでなく、築地居留地、函館居留地に暮らす中国人も管轄した。なお一八九七年七月から総領事館となった。

その後、一九一一年の辛亥革命で清朝中国は倒れ、中華民国が生まれる。辛亥革命の指導者孫文は、日本亡命中に横浜に滞在しており、横浜華僑は革命の成功に貢献した。本国の政権交替により、横浜の清国総領事館も中華民国総領事館となるが、関東大震災で明治時代の領事館の建物は倒壊した。

総領事館から公園へ

震災直後、総領事館は一時期、西戸部や山下町一四一番地に移転するが、一九二五年には再び一三五番地に戻り、確認される限りでは、一九三二年までは同地に所在した（『横浜復興誌』第四編、昭和七年三月）。なお、震災復興事業の一環として、旧居留地の永代借地権の買収が進められたが、当該地は中華民国政府の公用地であったためか、買収はされていない。

一九三三年以降は中華民国総領事館は山下町一五三番地、八七番地、二〇二番地などを転々とする。これには日中戦争にともなう中華民国南京政府の外交団の引き上げと、日本の傀儡政権である北京臨時政府、王精衛国民政府の外交団の着任といった問題と関係する。一九三七年七月、日中戦争が勃発し、日本が北京臨時政府を樹立する。横浜中華街でも南京の中華民国政府を支持するか、北京臨時政府を支持するかで揺れ動く

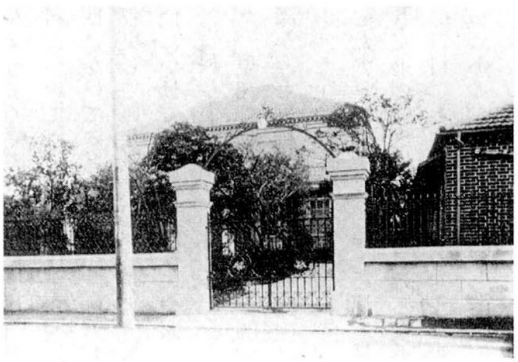


図3　駐横浜清国総領事館　『日本写真帖』（1910年）より

が、地元華僑は「日華融和」を選択し、南京政府の総領事館は一九三八年二月六日に閉鎖となる。その後一九三八年四月五日、山下町二〇二番地の親仁会事務所に、中華民国臨時政府（北京臨時政府）駐横浜弁事所が開かれ（『横浜貿易新報』昭和一四年四月六日）、一九四〇年九月一日、同所に王精衛国民政府の領事館が開設されたのである。

領事館移転以後の一三五番地の用途は定かでないが、後述するように一九五八年に中華民国政府が当該地の不動産登記を行なっていることから、当該地の借地権・所有権は中華民国政府が保持していたと考えられる。なお、一九四二年四月一日、永代借地制度が撤廃され、当該地の永代借地権は土地所有権に転換される。

一九四五年五月の横浜大空襲により、この場所を含む中華街一帯が焼失したこともあり、戦後まもなくの状況は不明である。その後一九五八年（昭和三三）三月六日、中華民国政府によって一三五番地ノ一の不動産登記がなされる。そして、同年三月三一日、他の市有地との交換によって横浜市に所有権が移転される。したがって、不動産登記はこの横浜市への所有権移転の必要から行われたと考えられる。そして、横浜市緑政局公園部の「都市公園台帳」によれば、昭和三四年の児童公園整備事業として諸施設が整備され、翌年四月一日、児童公園として山下町公園が開園された。

図4　レンガ類の出土状況（公園内砂場予定地）
2000年1月28日撮影

発掘された瓦とレンガ

さて、今回山下町公園から発掘された瓦やレンガは、関東大震災当時のものである。一九二三年（大正一二）九月一日、未曾有の大地震が関東地方を襲い、横浜の中心地は瓦礫の街と化した。中華街は古い木造やレンガの建物が密集していたため、ほとんどの建物が到壊・焼失した。震災以前中華街には五七〇〇人あまりの華僑が暮していたが、震災により一七〇〇人あまりが亡くなった。生き残った人々も大半が阪神地域あるいは故郷の広東・上海などへと帰国し、一時は横浜の華僑人口は一七五人にまで激減した。領事館の場合も例外ではない。領事館の建物は到壊し、その下敷きとなった長福総領事と領事館員が命を落とした。総領事をはじめ、中華街で亡くなった人々の遺体約一〇〇〇体は総領事館の跡地と近くの大同学校跡地で荼毘に臥せられ、中華義荘に埋葬されたのである。

こうした震災の凄まじさを伝えるのが、今回発掘された瓦やレンガの破片である。瓦については大半がジェラール瓦であるが、どれも砕けた破片で、完全品は出土しなかった。ジェラール瓦というのは、フランス人実業家A・ジェラールが、明治の初年から四〇年頃まで、現在の元町公園内、旧山手居留地七七番地で製造していた瓦である。当時の洋館の多くにこの瓦が使われていた。今回発掘されたジェラール瓦は「一八七八」と印刻された中期型ジェラール瓦の赤と黒である。「一八七八」とは製造年を示す。同時期の赤の棟瓦の破片も出土した。これらはおそらく領事館の屋根瓦に使われていたのであろう。

このほか、明治一〇年代に居留地の下水道を作る際に使用された小菅集治監製のレンガなども発掘された。レンガには製造所を印す刻印がおされている場合が多く、小菅集治監製レンガには分銅印が刻まれていることからそれとわかる。また、耐火レンガ「YOKOHAMA」の破片や「天津租界裕慶永」としるされた酒がめの蓋など、陶器類の破片も多数出土した。なかには猛火の高熱でとけたガラスが付着した陶器もふくまれる。

図5　発掘された瓦・レンガ・陶器類の一部

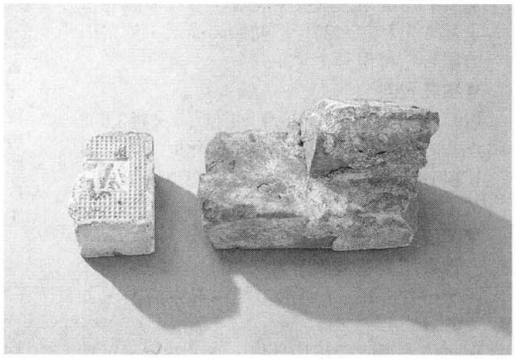


図6　小菅集治監製レンガ（右）と耐火レンガ「YOKOHAMA」の破片（左）

新たな世紀を目前とした年に、過去の歴史をふりかえるものが発掘されたのは、意義深いことである。この街は日清・日露戦争、関東大震災、日中戦争という災害・戦争の悲劇を乗り越えて、日本人と中国人がともに暮らす街として成長してきた。この二〇世紀の道のりを忘れるなと、次の世紀に生きる私たちに語りかける。今回の公園改修工事で発掘された瓦やレンガは、過去から未来へのメッセージでもある。（伊藤泉美）

新聞万華鏡②
電話帳から

京浜通信

本年度の第一回企画展示「歴史資料への招待―受け継がれた横浜の記憶―」に、岡コレクションの電話帳を展示しました。当館では、明治期から昭和戦前期に発行された電話帳を何冊か所蔵しています。明治一七年（一八八四）から大正五年（一九一六）までの『神奈川県統計書』には、各年に発行された新聞の紙名・発行所・刊行頻度・発行高などが記載されており、原紙が発見されていなくてもどのようなものがどれだけ発行されていたのかがわかりますが、大正六年以降にはその記載がありません。電話帳は、新聞の発行場所・発行期間を知るための資料の一つとなります。今回は、現在の「タウンページ」につながる職業別電話帳から、大正期の新聞社に関係する項目の内容を紹介します。

『東京横浜職業別電話名簿』大正七年用（弘益社　大正七年二月）

当館が所蔵するものは、早稲田大学図書館が所蔵する原本の「横浜之部」の複写です。そのうち新聞社・通信社は、「新聞雑誌業（新聞記者・雑誌記者）」、「通信業」に分類されています。その記載事項は、電話番号・加入者名・住所・職業の順です。

新聞社を見てみると、まず、横浜に本社を置くものは、横浜日日新聞社、横浜貿易新報社、横浜内報社、横浜毎朝新報社、横浜新聞社、横浜商業新報社、アドバタイザー・パブリシング株式会社、商況日報社、ジャパン・ガゼット社の九社です。次に、東京に本社を置く新聞社の横浜支局・出張所などは、報知社、東京日日新聞、東京毎夕新聞社、中央新聞社、中外商業新報、やまと新聞、万朝報、国民新聞社、朝日新聞社、ジャパンタイムス株式会社、時事新報社、世界新聞の一二社です。通信業では、横浜通信社、横浜内外通信社、商業通信社が掲載されています。

『神奈川県職業別電話名簿』（横浜通信社　大正一五年一一月）

関東大震災後に出版されたものです。「横浜之部」と「地方之部」に分かれており、記載事項は、電話番号・加入者名・住所・職業です。新聞社関係は、「新聞及通信業」に分類されています。

大正七年用の電話帳に載っていた新聞社のうち横浜に本社を置くものでは、横浜貿易新報社、横浜毎朝新報社以外は見あたりません。新たに加わったものには、横浜経済日報社、日本貿易日報社があります。次に、東京に本社を置く新聞社の横浜支局では、中央新聞社、世界新聞がなくなり、都新聞社、読売新聞社、ジャパン・アドバタイザー社が新たに加わりました。通信社は、京浜通信社、横浜通商社、日本新聞連合社横浜支局が新たに加わっています。

横浜に本社を置く新聞社が発行する新聞で、残念ながら当館が一号も所蔵していないのは、大正七年用の電話帳に記載のあった横浜内報社・横浜新聞社・横浜商業新報社・商況日報社発行のものです。これからも新聞を収集したいと思いますので、情報をお寄せください。（上田由美）

資料館だより

▼展示

(1)「咸臨丸 太平洋を渡る－遣米使節140周年－」 8/2(水)～10/29(日)

(2)「歴史を集めつむぐ人々－史料保存と編さんの歩み－」（仮称） 11/1(水)～平成13年1/28(水)

震災や戦災、社会変化の中で営々と続けられてきた歴史資料の収集保存と歴史編さん事業の歩みをたどり、横浜開港資料館設立の前史を明らかにします。

(3)「絵葉書で見る100年前の横浜・神奈川」（仮称） 1/31(水)～4/22(日)

今から100年ほど前に誕生した絵葉書によって、関東大震災や戦災、戦後の開発によって失われた20世紀初頭の横浜・神奈川の風景を再現します。

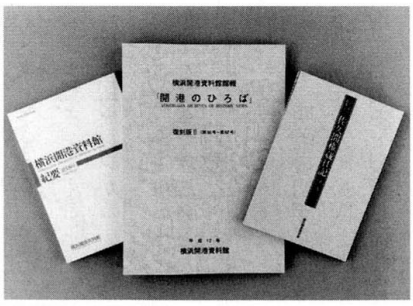
▼寄託資料

(1) **堤家資料** 3,766点　内訳　文書3,609点、絵図面・絵地図88点、文化財（堤石鹸資料）18点、絵画8点、錦絵43点（磯子区久木町　堤真和氏）

▼講座

神奈川宿遊学セミナー共催

- **テーマ** 「幕末明治の江戸・東海道・よこはま」
- 日時　平成12年10月14・21・28日・11月4・11日のいずれも土曜日、14時から（13時30分開場、14時開講）16時まで、なお、11月4日は12時30分から16時まで
- 会場　横浜開港資料館講堂と神奈川宿歴史の道
- 講師及び講座名（開講順）　竹内誠（東京都江戸東京博物館館長）「幕末江戸の世相」、横田洋一（神奈川県立歴史博物館専門学芸員）「幕末明治の横浜と五雲亭貞秀」、山本光正（国立歴史民俗博物館助教授）「明治の旅」、神奈川宿遊学セミナー「神奈川宿歴史の道－幕末の領事館などを歩く－」、伊藤久子（横浜開港資料館調査研究員）「日記に見る神奈川宿と外国人たち」
- 受講料　全5回で2,500円
- 募集人員　80人（多数の場合抽選）
- 応募方法　往復ハガキに住所、氏名、電話番号を明記のうえ9月30日までに、〒231-0021 横浜市中区日本大通3 横浜開港資料館講座係へ（Tel201-2100）



▲新刊本3冊が発売

『横浜開港資料館紀要第18号』（本体1,457円＋税）、『横浜開港資料館館報 開港のひろば 復刻版Ⅱ』（本体価格1,200円＋税）、『佐久間権蔵日記 第2集』（本体1,715円＋税）の3冊がこのほど刊行され、好評発売中です。いずれも新館1F受付でお買いもとめできます。

休館日等のお知らせ

月曜日および8月1日(火)、9月26日(火)、10月10日(火)、10月31日(火)、11月24日(金)、年末年始（12月28日(木)～平成13年1月4日(火)）、1月9日(火)、1月30日(火)、2月13日(火)は休館させていただきます。

なお、閲覧室は、上記のほか、8月31日(木)、11月30日(木)、1月31日(水)、2月27日(火)～3月2日(金)も資料整理のため休室させていただきます。